

箱のおもてに書き、募金活動をしていたことがあるが、結局そうして集まった金は統一教会の本部へと吸い上げられて行ってしまい、募金活動をしている当の本人ですら、その金が何に還元されるのか知らない。」ということである。だから募金活動をした以上義務であるべきはずの一般への決済報告も一済なされないことになる。5月16日の朝日新聞朝刊のAFP時事通信によると「原理運動で知られている文鮮明を指導者とする『世界基督教統一神霊会』が世界本部を設置するために、ニューヨークのニューヨーカー・ホテルを買収したことが13日明らかにされた。マンハッタンのマジソンスクエア・ガーデン近くにある40階建て2000室の同ホテルを500万ドル（約15億円）で買収、ここに本部を置き、信徒や資客の宿泊、さらには会談、セミナー、文化交流の場として使用する。ホテル買収費用の全ては外国特に日本からの寄付によるものだという云々……。」さらに又中国新聞5月26日付夕刊によると「統一教会（筆者注、統一協会）グループは……6月1日にニューヨークのヤンキースタジアムで『米建国200年を祝う大集会』を計画して、ニューヨーク市内の街頭で連日派手なキャンペーンを展開している。同教会はこの運動に100万ドルを注ぎ込んでいるといわれ……」そしてさらに最近になっては、「一説によると、免税扱いを受けている宗教団体としての統一教会が米国で蓄えた財産は3500万ドル（注、約105億円）。全米100以上の都市に置いたセンターで年額1,200万ドルを集める同教会の資産費用に、米国税庁が疑惑の目を向け始めた。（6月5日付朝日新聞）」のである。

「めぐまれない子らに愛の手を」（もちろん同じ文面で真面目に募金活動をしている団体もあるが）という名のもとに集められた募金は、凶らずもそのほとんどが文鮮明ら幹部の手許へと集約されているだろうことは十分考えうる。募金する者の心を踏みこむこのような行為は断じて許すことはできないし、私達はここにもまた原理運動の虚偽性を見定めねばならない。ところが彼等、原理運動の者にとっては、手段はどうあれ、文鮮明先生＝神に金を捧げるのは、募金した人がそれだけ背負っている罪を浄化することになるという復帰原理によって正当化されてしまう。だから募金活動するものにとっては、そうした「サタン（悪魔）」側から「神側」へと魂の救済をすればするほど、より実践的でより信仰心

の篤い信者になると判断される。これは、まさしく現代の免罪符とでも言うべき偽善的なもので、権力側に安易に寄り添い、在来の資本主義体制の上にあぐらをかいた宗教が金で人の魂の浄化の程度を計るという意味で、資本主義の歪みが二重の形で吹き出しているといってもよいだろう。原理的解釈によれば彼等以外の者は全てサタン界にいるものとなり、サタン界の者からならばいかなる手段であろうが金をせびり取っても良いなどという態度は宗教者としてはすこぶるいい加減なものだ。なお、彼等の「統一史観」によれば、神側（善、アベル型）＝宗教改革＝第二宗教改革＝民主主義（米、英の自由主義国家）。サタン側（悪、カイン型）は、ルネッサンス＝啓蒙思想・フランス革命＝共産主義（ソ連、中共の共産主義国家）ということになり「希望の日」は神側が完全にサタン側を凌駕した時に始めて到来するのである。ここで問題にしている募金正当化のためのサタン概念は、単に共産主義側にだけ向けられるのではなく、統一教会以外の全ての人達に対して拡大解釈されている。さらに共産主義を直情的・感情的に否定しその背後で、資本主義体制の中で、安閑として政治エゴのために行動する原理運動が現在ロッキード問題でやり玉に上がっている右翼やKCIAとどす黒くゆ着している様相を見逃がしてはならない。5月26日付けの朝日新聞朝刊ニューヨーク支局24日発の記事は「24日夜発売のニューヨーク・タイムズ紙は、『原理運動』で知られ、米国内で盛んな宗教活動を繰り返している韓国の文鮮明氏の運動が韓国政府と韓国中央情報局（KCIA）の援助を受けており、日本の児玉誉士夫からも資金援助を得ていると一面で報じた。クリッテンデン記者の報道によれば、文氏の『統一教会』の運動は、米国の韓国に対する軍事、経済援助を確保するため、米国内に韓国支持の空気を作ること力をいれており、米議会でロビー活動もおこなっているとしている。米国の税関当局によれば、文氏の側近たちが日本、韓国から米国へ資金を運ぶのに、韓国政府が外交ルートを提供しているという信すべき理由があるとしている。加えて、文氏の関係している『国際勝共連合』は、日本の笹川良一氏、児玉誉士夫氏から資金援助を受けていると同紙は報じている。」以上からも、文を頂点とする原理運動が本当の意味で民衆の側に立つ宗教ではないことは確かである。

＊

さて、再び広大校内の実状にもどろう。6月1日に広島大学会館で“激動するアジア情勢とアメリカの使命”と題する大巻利治の講演会が行なわれた。この講演会の主催者は全国共産主義研究会(原理研)であり、そのアピールは「左翼全体主義(ソ連, 中共, 北鮮)の脅威から日本を守ろう。建国200年にあたり、真のアメリカの姿を知ろう。日, 韓, 華及び自由アジアの団結を促進しよう。混迷する学内に創造的理念を提供しよう。」というものである。会場内には主催者側発表450名, 当私見によれば約300人前後が集まり, 原理研関係以外の学生は100名前後だと見られる。会は5時頃始まり, 初っ鼻より外人コーラスグループにより4曲の歌が歌われた。続いて, 共産研活動報告として2年間アメリカ各地を回りながら, その実情をつぶさに見聞したというイギリス人KIM氏のアピールが行なわれた。「アメリカの大学, 社会の精神的危機について」, 一通りのメッセージを述べ, 「アメリカはその建国の精神に帰えり, 世界の為にある(?)アメリカとして, その誇りをとりもどすべきである。」というような事を発言した。なお, 1776年のアメリカ独立宣言には, 「…いかなる政治の形体といえども, もしこれらの目的を毀損するものとなった場合には, 人民はそれを改廢し, かれらの安全と幸福とをもたらずべしとみとめられる主義を基礎とし, また権限の機構をもつ, 新たな政府を組織する権利を有することを信ずる。」と明らかに「革命権」が主張され, 「…連続せる暴虐と篡奪の事実が明らかに一貫した目的のもとに, 人民を絶対的暴政のもとに圧倒せんとする企図を表示するにいたるとき, そのような政府を廢棄し, 自らの将来の保安のために, 新たな保障の組織を創設することは, かれらの権利であり, また義務である。」と続いている。KIM氏の唱える, そしてこの大会のアピールにある, アメリカの建国の精神にたち帰るべきだ, という主張には上述した独立宣言の精神が本当の意味で生かされているだろうか。というのも, KIM氏に続く共産研活動報告として「大会準備中の, 一部左翼学生の中傷と暴力に訴えた妨害活動は後をたたず, 大学界の腐敗した実態を痛感してきた我々であるが…」云々の内容の事を提起したにもかかわらず, 後の大巻の講演中に立ちあがって異議を申し立てた一学生を暴力的に(四方から原理研の者数人が彼の発言を封じようとして, 場外へ強制的に)追放し(なおそのために

その学生は鼻血を出していたが)講演の進行を続行させようとしたのである。翌月6月2日にくばられた共産主義問題研究会のビラの部分には「なお, 講演中も, ヤジをもって妨害活動を行なった心ない一学生も人々のひんしゅくを買うのみ。大学人のモラルの低さを憂うものである。」と掲載しているが, ひんしゅくを買うべきなのはむしろ共産主義問題研究会の方である。そうした彼我の顕在化した矛盾はさておき大巻は講演の中で, ベトナム戦争を中心に, 共産主義陣営の恐ろしさを述べひたすらアメリカ礼讃一本槍で論を進めた。パリ和平協定において, 協定を守ったのはアメリカ軍の徹退のみで, 共産主義者=北ベトナムは約束を全て破ったと言うのである。彼は, ベトナム戦争がそもそも誰のおかげで始まり, 誰によって南北に分断されたのかを全く考えていない。暴力によって場外に連れ出された学生の衝いた点はまさにそこだったのである。米国の帝国主義的軍事介入に対して良識あるアジア人ならば, 必らず, 大巻の白々しい, アメリカ礼讃には抵抗を示すはずであり, 又それが当然なのだ。1945年, ハノイで, ホー・チ・ミンを主席とするベトナム民主共和国臨時政府の名で発表されたベトナム民主共和国独立宣言には, フランスの植民地政策とそれに続く日本の帝国主義支配のとってきた態度に対して, それらはベトナム人民の, フランス人権宣言の精神でもある, 自由, 平等, 博愛の旗をけがし, 正義と人道に反する行為だと指摘し, ベトナム人民の自由と独立を高らかに宣言している。このベトナム独立宣言はかつてのアメリカ独立宣言の他民族の従属からの解放, 他民族支配からの独立の精神を反映しているのである。人民の「生存権」と「革命権」を基礎にしたアメリカ独立宣言も, ベトナム民主共和国独立宣言も明らかに「民主主義」の思想を軸に持っている。しかし, アメリカは自国利益のために軍時介入をするという時点でベトナム独立宣言, さらにアメリカ自身のかつての出発点であった独立宣言をも踏みにじたのである。どのような屈服をつけても, そのような根本的な誤りを認めるわけにはいかない。“世界情勢に鋭い指針”というビラの題目は明らかに“世界情勢に鈍い誤針”であったと考えねばならない。一学生に暴力を加えておいてなんら自己批判もせずに逆に真実を歪めていなおる原理研の自己欺瞞性は明らかである。彼等は, アメリカ侵略軍によるソソミ虐殺や北爆の多大な被害を受けた罪のない子供ら

の魂を冒瀆し去るものである。そこには先人たちが活し、学んできたことの歴史的教訓はなんら生かされていないし、彼等が日頃唱える“愛”の本質もそこに見えている。

＊

「愛を、連帯を」と微笑んでくる統一教会の学生が自分達の神と信じているカリスマ的存在たる文鮮明そしてその側近者たちの欺瞞をも正当化するならば、私達はその洗脳の深さに感嘆せざるをえないだろう。それは寛容でもなんでもなく本音を言わない、否、本音さえも組織の枠の中で見失っている状態と言える。安定した組織に自己同一性を同化することによって彼等は「なぜか?」「なぜそうするのか?」という根本的な懐疑の精神を放棄している。それは真なるものを見極めることができているところにおいて人間喪失あるいは自己疎外に陥っているとさえ言える。彼等の目指している“愛”によって導かれた人間関係というものが実際は、甚だ不自然な形をとって現われる。それというのも、彼等はまず「神を信じますか? 神の愛を信じますか。現代は愛が欠けています。だからこそ神の愛によって私達は生きるべきです。」というようなことをにこにこした顔で寄ってきて言うのである。彼等が現代における愛の不在を唱えることに異論はない、その通りだと言える。ところが本当の人間関係とは、しょっ鼻から「愛」や「神の愛」を持ち出すだろうか。否、裸の人間関係とは、知らず知らずのうちに親しくなったり、色々な喜怒哀楽を通して始めてお互いの信頼関係が出来ていくものではないのか。そこには概念以前、図式以前の生<sup>なま</sup>のままがある。そして本当の人間関係で「愛」や「神」が論じられるのは、親しさが極まってからであろう。又、彼等は共産主義者もしくは、自分達に同調的でない人には近づいてはこないし接触することを極度に嫌う。これは原理講論によって体系づけられた思惟しかしなない彼等が(3日間の修練、さらに7日間、12日間の集中的な教育は一種の宗教的恍惚感の中で行なわれ、そこには自由な選びの精神や批判の入りこむ余地はない、彼等はただ上からの言葉を甘受するだけである。)勝共を叫んでいながらその実、唯物弁証法がいかなる歴史的必然のもとに出てきたのかを知らうとはせず、(彼等は弁証法をどのように理解しているのだろうか? 上部から与えられた勝共理論を堅固にせんがために共産主義を研究していらっ

しゃるらしいが、そのような態度は、方法論としておおよそ弁証法的ではない。)だから、人を選びをして、特に自分達にとって都合の悪い者は避けて、同調しそうな者だけに近よって行く行為は、本当の意味でのキリスト教の普遍的な愛ではない。彼等が本当のキリスト教徒であれば、共産主義者をも愛するはずである。彼等の結ぼうとしている人間関係は、多分に打算的であり、作為的である。打算や作為が先行している政治的な愛はいくら積み重ねた所で、うその上にうそを積むようなものだ。利害、打算のない人間関係によってのみ“我”と“汝”の関係がいわば偶然的な一対一の出会いを通して導かれるのである。こうしたしらじらしい友愛を志向する態度は、他面、実際には何ら宗教的実践を行っていないことと無関係ではない。せいぜいすることと言えば、学内の清掃キャンペーンぐらいである。ぱっぱと学内を清掃したり、(最近では、あまり見かけませんが)統一教会に心酔しそうな学生を勧誘に回することで自分達の実践だと満足している姿は多分に自慰的である。宗教として、混沌とした現在によって立つならば、どうしてまず自分達の身近にある福祉問題や公害問題、朝鮮問題を根本的に自らの内で問題化し、地道に、個人的に努力しないのか。私達はそこに、かえっておおよそ宗教的でない妥協の精神、盲目の精神を見る。そうした社会の表面だけをとらえた態度はさながらどこかのお坊っちゃんの自己満足である。しかし、こうした原理研の現象的な興隆に本当の現代の危機があるのではない。問題はむしろ、原理研が容易に入ってゆけるだけの日本の歪んだ型での核家族化の進行と親子関係の断絶、さらには人間同志の信頼関係の欠如である。そしてさらに言わせてもらえば、広大はおろか日本の大学の学生、教官の人間として当然もつべき主体性の欠如である。原理研が入り込んできても、なお平気なその無関心さである。原理研の唱える現代の愛の欠如はむしろ、大学生さえも例外ではない現代人の、自己空洞化、精神的浮帯の一面を言いあてているとさえ言え、またそうした傾向自身が虚偽的な宗教団体(さらには、格子なき牢獄国家化)を育成している核であり相補的關係でさえあるのだ。私達は、今後、にせものとはんものを見極める目をやしない学生としての良心にのっってこの現象を土台から解明し、空洞化した殻を破るだけのイニシアティブを高めてゆかねばならないと思うのである。

# 三つの書評

最近、どうも書き手の人間性や実践を知らないとその人の著作がまゆつばものに思えてくる。それは又、表現することの限界、学問することの限界にも通ずるし、逆にそうした限界の中でいかにして「やさしきもの」と「誠実なるもの」の両極を貫ぬいていくかを我々に提起してくれる。かつての全共闘運動が「先生、言ったことは守りなさい」と学者の言行不一致を追求した根本的精神はもちろん学者以外の全ての人間にあてはめて考えられねばならない。ただ言行一致、実践、行動ばかり叫んでるとつつい浮き足立つ。地道に努力する「言」は必ず「行」と一致するはずだし、地道な「行」もまたきっと「言」と一致するはずだ。

## 高木市之助全集のこと

深 萱 和 男

どんな学問の世界にも、その学問を深く極め、新しい学風を創り上げた何人かの先達がいるはずです。学問を山脈にたとえるならば、それらの先達は、いわばその山脈に聳え立ついくつかのピークをなすと言ってもよいでしょう。ぼくたち後進は、それらの峰々をこの眼と足でたしかめながら、新しい学問の創造に向かわねばなりません。

高木市之助先生は、日本文学研究におけるそのような巨峰の一人でありました。先生の晩年の約25年間、そば近く教えることができたぼくは、いま、遺著の編集を担当しながら、あらためてそのことを思わずにはいられません。

こんど講談社から出版されることになった「高木市之助全集」の内容見本に載せた刊行の辞に、ぼくは次のように記しておきました。

＜高木市之助博士の学問は、みずみずしい感性と強靱な論理、精緻な実証によって、単に明日の国文学への指針たるのみならず、ひろく古典を愛する読書人に、文学の真の人間の意味を語りかけるものであります。＞

先生の学問の歩みは、「国文学五十年」（岩波新書・全集第九卷所収）に詳しく語られていますが、先生が80余年の生涯をかけて求めてこられたものは、文学とその研究を人間の場に解放することでした。

戦争中の「吉野の鮎」（全集第一卷所収）に続く

戦後の代表的著書「古文芸の論」（全集第6卷所収）では、しばしば三木清の「構想力の論理」のことに触れられています。構想力は人間のロゴスとパトスを統合する力であり、芸術—文学もその一つであることは言うまでもありません—は、構想力が生み出した最勝義の＜形＞です。したがって、芸術—文学—を対象とする学問もまた、すぐれて人間的な営為でなければなりません。（もちろん、だからといって、文学研究がそれ自身の殻に閉塞しておればよいというわけではありません。むしろ、その逆に、文学研究は、もっと主体的に他の諸科学の成果を吸収しながら、独自の方法を開拓してゆくべきでありましょう。）

具体的には、先生の一つの大きな関心は、リアリズムないしリアリティに向けられていました。たとえば、記紀歌謡の久米歌における民衆生活の反映の指摘は（前掲「吉野の鮎」）、「うちてしやまむ」で終るその歌謡が、戦争中戦意昂揚歌としてのみ解釈され流行しただけに、当時のきわ立った発言として今もその価値を失っていません。そしてそのようなリアリズムないしリアリティへの関心は、最晩年の「貧窮問答歌の論」（全集第三卷所収）にまで持続されています。同書の中で使われている＜孤語＞という術語は、実証に裏うちされた感性と論理を総合した、いかにも先生らしい造語です。万葉集4500